

## 厚岸湖・辺寒辺牛湿原の地衣類の分類学的研究（要旨）

千葉県習志野市立習志野高等学校

志波 敬

地衣類とは菌類と藻類が共生した複合生物であり、あたかも1つの生物のように振る舞うので、共生という観点からも興味深い生物である。菌類は子嚢菌類と担子菌類で、藻類は緑藻と藍藻であり、主な組合せは子嚢菌類と緑藻類である。大気汚染に非常に弱くヨーロッパに於いては古くから大気汚染の指標生物として検討されてきたが日本では十分に検討されてきたとは言い難い。本研究では厚岸湖・辺寒辺牛湿原の周囲及び高層湿原内部において約1000点の標本を採集し、これらの標本について薄層クロマトグラフィー法および顕微化学法により地衣成分を調べ、また孢子、粉子器、子器や地衣体を双眼実態顕微鏡と生物顕微鏡により形態観察を行い、分類学的研究の結果、173種の地衣類を報告した。

最も多くの種が観察されたのは北大臨海実験場、愛冠岬、筑紫恋キャンプ場への遊歩道等の愛冠地区である。ここではゲジゲジゴケ属、アンチゴケ属、ハナゴケ属、アオキノリ属、カプトゴケ属、ウメノキゴケ属、モジゴケ属、チャシブゴケ属、ツメゴケ属、トリハダゴケ属、ウスバカプトゴケ属、カラタチゴケ属、ヨロイゴケ属、サルオガセ属などが観察された。また、厚岸から霧多布へ向かう道路沿い両サイドのトドマツ主体の北海道道有林ではアカサルオガセ、ナガサルオガセ、ヨコワサルオガセ、トゲワタサルオガセ、アッケシサルオガセなどのサルオガセ属が多く見られた。特にアッケシサルオガセは2000年に大村らにより報告されて以来、2度目の報告である。この地域のサルオガセ類は比較的その長さが他の地区と比較して長く、量的にも質的にもサルオガセの状況は良いことが観察された。サルオガセ属は大気汚染に最も弱い種類の一つであり、大気汚染の指標になる生物である。今回の調査では比較参考のために厚岸の周辺地域（厚岸以外）も調査を行ったが、厚岸のトドマツ林におけるサルオガセの生育の良さは特筆に価するものである。これはこの地域の大気環境が非常に良い事を示している。日本国内はもとより北海道内においてすら絶滅しつつあるサルオガセ属がこのように生育している地域の自然は貴重な自然遺産であり、この自然を保護する事は非常に大切な事である。また、厚岸神社、国泰寺などの社寺林にもヤマヒコノリ属、サルオガセ属、リメリア属、ムカデゴケ属、クロボシゴケ属など多くの地衣類が観察された。また辺寒辺牛湿原の高層湿原内部において、タカネゴケモドキ (*Cladonia alpina*)、ワラハナゴケ (*Cladonia arbuscula*) などハナゴケの仲間が観察された。今回、大黒島の調査も行ったが、大黒島は強風にさらされている事が多く、大きな樹木は生育できないが、カラタチゴケ属、メラネリア属、ムカデゴケ属などが見られた。

大気汚染の今後の問題は高濃度の局地的な問題ではなく、広範囲な低濃度の汚染である。このような貴重な自然が残されている厚岸の自然を地衣類の分布から評価していく事は意義のあることである。